



保

育

雜

感

及 川 ふ み

一日の保育が終ったあと、幼稚園の教師たちが集ってそれ  
ぞの立場から、今日の保育の反省を語り合うさまざまな話  
題にからんで、でてくるものの結論となっている問題は、一  
組一教師の担当する幼児数や、保育室の広さなどに起因とな  
るもののが相当数あるように考えられる。

#### 幼稚園設置基準のうち、

##### 一組の幼児数

##### 四〇人以下を原則とする

この解釈は、幼稚園でのひとりの教師が担当する幼児数  
は、四〇人が最大限度であるということが示されていて、保  
育にのぞましい一組の幼児数は四〇人以下であるということ  
の意味であろう。

しかし普通この基準について、ことに経営するものの面か

らは、一組の幼児数は四〇人定員というような感が強い。ま  
た実際これによって運営計画がたてられているものが多いよ  
うでもある。

これは幼稚園経営の立場からは、一応やむを得ないことと  
も考えられる。

そこで普通の幼稚園では、一組の幼児数は四〇人というた  
てまで保育計画ならびに実践、ということになつてくる現  
状であるといえよう。

なおこの一組の幼児数については、年令の点で、とくにう  
たつてているわけではないから、四才児、五才児とともに一律に  
とり扱われているわけである。

四月の新学期のはじめの頃の多くの幼稚園の現場、四才児

四〇人などの場合などは特に教師も、幼児もともども多くの

難関をのりこえていかなければならないことになる。

泣くもの、くつづいてばかりいるもの、にげかえるものなど、一人にひとりずつのおとなとの手のほしいものが多数いる。そこでこの期は、園長も、主任も、組担任外の教師も、傭員もというように全園のおとなというおとなはあげて、各組の教師の応援という形で、この難関をきりぬけているのである。

四月、五月とすすむにつれて、手足まといの状態のものが一人へり二人へりして、ひとりの教師が一組の幼児をどうにか一応はまとめられていくようになってくる。こうして雑然とした幼稚園も、次第におちつきがみえてきて、真にたのしい幼稚園の状景があらわれてくる。

しかし保育の実際がすすむにしたがって、一組四〇人定員はますます問題をからませてくる。それは一人ひとりの幼児の指導という面にぶつかってきて、新学期の全園のおとながあげての応援ということでの単純なものとはことなった重要な問題である。

幼稚園教育の困難さもここに大きくうかんでくるわけである。

普通の幼稚園では、一組の幼児の中には、いわゆる問題児

でない問題児が相当数いる。それが一時的である場合もあり、また常習的のものもありその状態はさまざまである。

また問題となる要因にもさまざまある。家庭の環境から、あるいは健康状態から、あるいは幼稚園生活からなどと観察されるものがある。

この問題児の指導も、一組の幼児数が少数である場合には個々の特別指導が、組全体の指導の中で、混然とした自然の形態でとられることにより問題もなく進められていかれるという一応の可能性もあるが、一組の幼児数が四〇人前後という多数の場合には、この方法ではなかなか困難なことであつて、多くのぞむべきではないようと思われる。

そこでこれが禍をおこして、問題児はもちろん適当な指導

がうけられないのみならず、そのために多数の他の幼児たちも多くの被害を受けているということである。

このような幼稚園の現状からみて、組担当者以外の教師の協力ということが、新学期のある期間のみの問題ではなくて、保育がすすめられればすすめられるに従つてその必要性、重要性がますます増大されていくものであろうと思われる。

現実の方法として、幼稚園の現場では、多くこの協力方法がとられているようであり、またこの方法をとらざるをえないともいえるのである。

ただここに一つ問題がのこされている。それはこの協力指導にあたって、計画性がもたれているかどうかという点である。

一組の幼児数が多数のために、助手的立場のものが組の担任者の要請によつて一時的に協力したり、あるいは、園長や主任が気つくままに臨時に協力したりなどするという臨時的、随所的になされている場合も多いのではないかろうか。これではよき協力指導とはいえないばかりなく、それの効果も弱いものとおもわれるのである。

協力指導に計画性がもたれ、その上での実践においてはじめて、協力指導の実績があげられ、一組担当幼児数の過多の

難点の一解決策ともなるのではなかろうか。

協力指導の計画については、まずははじめに

- 一、特別指導の対象児をきめる
- 二、指導の目標点をきめる

健康状態、家庭環境、幼稚園の生活状態など予備的調査

#### 問題児の要因をさぐる

#### 一、指導の方法およびその場

自由遊びの場、あるいは特別の場。個人的、グループに

#### おいて

#### 一、指導の時期および期間 など

準備、実践記録など計画性をもつてはじめられた。もとよりこれは、研究の為の研究というよりは、むしろ我が園、我が組の幼児の指導にあたつての問題解決の一策としてとうに、保育の実践に直面しての立場から考えられたことである。幼稚園では、常に他の上級学校とことなつて、年令こそ三才、四才、五才との差があり、教育内容についての分野もあることではあるが、大体において生活の中での指導という点から、教師互に特殊な指導をしていることが少ない。研究す

る面も、実践する道も、同じ方向をたどって進んでいることが多い。ここに幼稚園の教師間に便利も多ければ、またそこに不便さもある。ことにこの協力指導を実践する上に最も必要とするものは二教師間の「和」である。いかに協力指導が研究的に、合理的に計画されたとしても、その実践にあたつて和が欠如された場合には、紙上の空策におわるのではなかろうか。被害をうけるものは多くの幼児であり、幼稚園ではなかろうか。計画の出発点がよりよき幼稚園の育成であり、よりよき幼児の成長発達の指導の上に発生したものであることを根本的な目標として、計画だおれに終らないようにこころみることが何よりである。

#### 幼稚園の保育室の広さ

幼稚園の保育室の広さは、一組の幼児数と同様に、幼児指導の面で大きな関係におけるている。現今、基準に示されている広さは、もとより満足すべきものではない。しかし一応教師としての立場からは、与えられたものをいかに工夫して、有意義にそれを利用するかという点にしほられてくる。

保育室に備えられる、幼児用机、椅子、鉛筆引出、楽器、その他の保育用具用品が数々ある。そのうち一室保育としての必要性の高いものが相当量、相当数に及ぶ。これらが狭い

保育室をことさらにしているのである。

しかし幼稚園の保育室は、幼児の立場からこれを考えてみると、家庭に次いで彼らの安定感のあるところであり、居住の場である。ここに一室保育の重要な長所を考えたい。

この意味から考えると、特別な指導のための特別保育室、あるいは教育内容別保育室が用意されて、組解体保育などの指導形態がとられる場合もあるが、これにともなう長所と同時に短所も考え浮かれてくる。ここではとにかく一室保育の条件のもとでの問題とすることにする。

保育室の広さも、その使い方の工夫によつては広くもなれば、狭くもなる。便利にもなれば不便にもなる。保育室の備品についても常設のものもあれば、季節的に使用するものもある。また幼児の心身の成長発達の進度によつても取捨しなければならないものがある。多くの備品用具の類は固定することなく、移動の可能なものがのぞまれる。

いたずらにおとなの形式的な考え方よりは、むしろ幼児の生活の場、しかも安定の場としてふさわしい環境である保育室の構成は実際の面積からは別の面において、保育の実際指導にあたる指導者の工夫にまつものが多いのであるといいたいのである。